

「主体的・対話的で
深い学び」の
実現に向けた授業実践
学習指導案例と指導のポイント
vol.3 創作編

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント 4

新学習指導要領の全部又は一部を実施できる 4

学習評価は現行の観点で進める 5

「主体的・対話的で深い学び」の
実現に向けた授業実践
創作編

新学習指導要領における「創作」の内容について 6

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践 7

学習指導案例 と 指導のポイント

1. 題材名 8

2. 学習指導要領の指導事項 8

3. 題材の目標 8

4. 教材について 8

5. 題材の評価規準 10

6. 指導と評価の計画 (全3時間) 12

ワークシート例 18, 20

「移行期用資料」発行予定

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践
学習指導案例と指導のポイント

- vol.1 我が国の伝統的な歌唱編
- vol.2 鑑賞編
- vol.3 創作編 (本書)
- vol.4 器楽編
- vol.5 歌唱編

令和元年度中に順次発行予定 (発行順が変更になる場合があります)

移行期の指導に当たって

新学習指導要領で押さえないポイント

平成29年に告示された新学習指導要領において、音楽科の目標は次のように示された。

- 表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
 - (2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。
 - (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

音楽科で育成を目指す資質・能力が「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定され、そうした資質・能力の育成を目指すために「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿った目標が示された。それによって、生徒が教科としての音楽を学ぶ意味が一層明確になった。学年の目標についても、教科の目標の構造に合わせて、三つの柱で整理された。

また、内容構成については従来と同様に、「A 表現」「B 鑑賞」及び「共通事項」で構成された。指導する内容自体について大きな変更はなかったものの、「思考力、判断力、表現力等」「知識」「技能」のそれぞれの資質・能力に対応するように構成され、それによって、指導すべき内容が一層明確になっている。移行期においては、これらの点をきちんと踏まえながら、自らの授業について振り返り、指導の改善を図っていく必要がある。

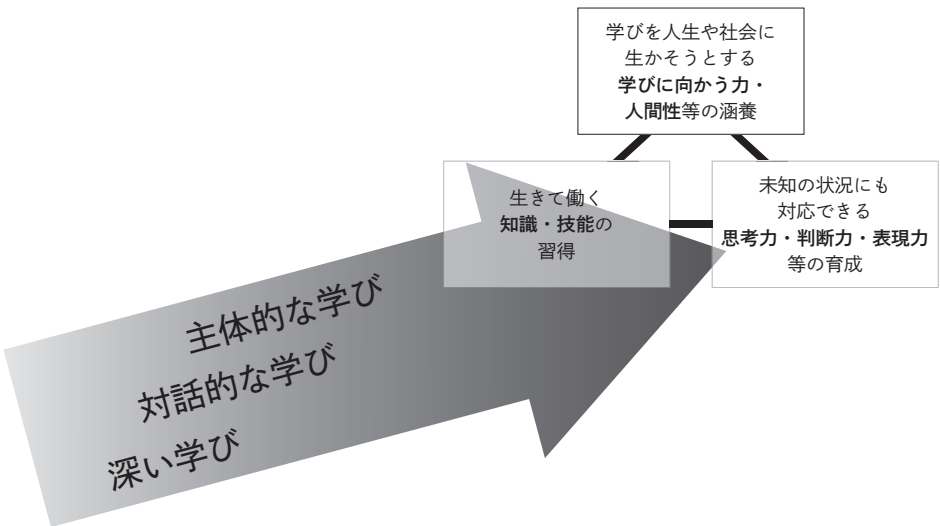
新学習指導要領の全部又は一部を実施できる

中学校においては平成30年度～令和2年度が移行期に当たり、音楽科の指導に当たっては、

現行中学校学習指導要領第2章第5節の規定にかかわらず、その全部又は一部について新中学校学習指導要領第2章第5節の規定によることができる。
(文部科学省告示第九十四号)

としている。

新学習指導要領の基本方針や趣旨を踏まえた授業改善を計画的、段階的に進めながら、授業の内容を考えていくことが重要である。特に音楽科においては、指導する内容については現行学習指導要領からの変更がほぼなく、学年度の学習すべき内容に支障を来さないため、容易に移行することが可能であるといえる。現行の教科書を使いながら「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組むようにしたい。



学習評価は現行の観点で進める

移行期における学習評価については、新学習指導要領の内容で指導しても、現行の評価規準の観点をを用いることに留意する必要がある。ただし、新学習指導要領が全面実施される令和3年度からは「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価する方向で検討が進んでいる。その点も視野に入れておくことが大切である。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践

創作編

新学習指導要領における「創作」の内容について

新学習指導要領やそれに関わる中央教育審議会答申において、創作分野における直接的な改訂については述べられていないが、新学習指導要領解説に示されている音楽科改訂の趣旨及び要点を理解し、創作分野において生徒に身に付けさせたい資質・能力を育成する学習活動とはどのようなものであるか、この移行期のうちに考えたい。

創作の内容は、次のように示されている。

「A表現」(第1学年)

(3) 創作の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、創作表現^{※1}を創意工夫すること。

イ 次の(ア)及び(イ)について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

(ア) 音のつながり方の特徴^{※2}

(イ) 音素材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴

ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること。

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説「音楽編」(以下「解説」)p.48

※1…第2・3学年では「まとまりのある創作表現」

※2…第2・3学年では「音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴」

イの(ア)(イ)に示されている指導事項について、具体的にどのようなことを理解させたいのかを教師が明確にすることが大切である。以下に例を示す。

イ(ア)①音のつながり方の特徴…順次進行や跳躍進行、上行や下行、また、音の長さなど、音のつながり方にはどのような特徴があるか。

②音階の特徴…長音階や短音階、民謡音階などの音階にはどのような特徴があるか。

③言葉の特徴…言葉の抑揚、アクセント、リズムなどにはどのような特徴があるか。

イ(イ)①音素材の特徴…声や楽器の音、自然音などの音素材にはどのような特徴があるか。

②音の重なり方の特徴…和声的な重なりや多声的な重なりなど、音の重なり方にはどのような特徴があるか。

③反復、変化、対照などの特徴…反復、変化させたときに、どのような特徴が生まれるか。

表したいイメージと関わらせて創作活動をする際に、これらの理解すべき内容を教師が音や音楽で示したり、生徒同士でそれぞれの特徴について話し合ったりしながら、実感を伴って理解

できるような学習活動を授業に組み入れることが重要である。

さらに、内容の取扱いと指導上の配慮事項として、現行の学習指導要領と同じく次のように示されている。

(7) 各学年の「A表現」の(3)の創作の指導に当たっては、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視すること。その際、理論に偏らないようにするとともに、必要に応じて作品を記録する方法を工夫させること。

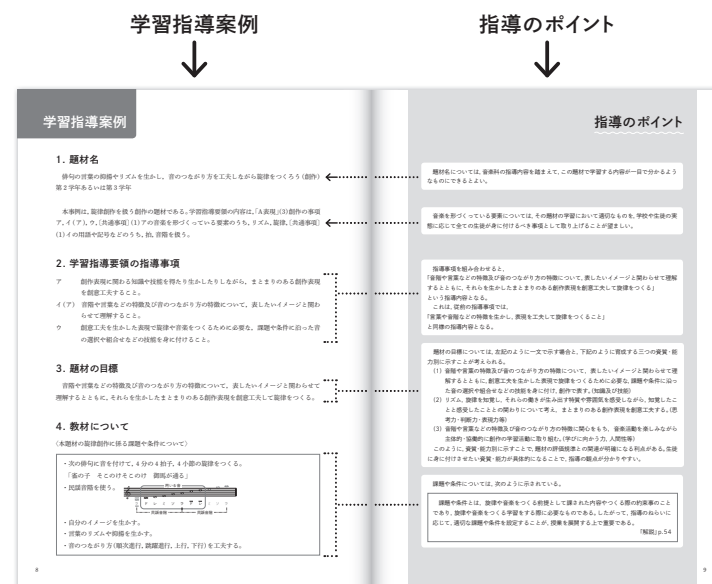
「解説」p.114(第3-2-(7))

旋律や音楽をつくるということは、とてもハードルが高いと感じている生徒は少なくない。作曲する際の理論はもちろん大切ではあるが、それに偏り過ぎず、「まずは音を出してみよう、つなげてみよう、重ねてみよう」というような生徒の意欲を引き出すための指導上の配慮がとても大切であろう。生徒全員で取り組めるような体験を取り入れ、楽しみながら創作活動に取り組むことができる学習活動を考えたい。環境が整えば、コンピュータの音楽作成ソフトや楽譜作成ソフトを用いた授業実践なども有効であろう。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践

音楽科の学習においては、心と身体を使って音楽を感じ取る体験や、他者との関わりを通して音楽のよさや価値を実感する活動が重視されている。そして、これらの学習指導を充実させるためには、「アクティブ・ラーニング」の趣旨を盛り込んだ「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち、学習活動と学びとの関連性や、学習活動を通して何が身に付いたかという観点で授業改善をすることが重要になる。

次のページからは、左(偶数)ページに「学習指導案例」を、右(奇数)ページには「指導のポイント」として、「授業のポイント」や「主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点」などを示す。



1. 題材名

俳句の言葉の抑揚やリズムを生かし、音のつながり方を工夫しながら旋律をつくろう（創作） ←.....

第2学年あるいは第3学年

題材名については、音楽科の指導内容を踏まえて、この題材で学習する内容が一目で分かるようなものにできるとよい。

本事例は、旋律創作を扱う創作の題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」(3)創作の事項ア、イ(ア)、ウ、〔共通事項〕(1)アの音楽を形づくっている要素のうち、リズム、旋律、〔共通事項〕(1)イの用語や記号などのうち、拍、音階を扱う。 ←.....

音楽を形づくっている要素については、その題材の学習において適切なものを、学校や生徒の実態に応じて全ての生徒が身に付けるべき事項として取り上げることが望ましい。

2. 学習指導要領の指導事項

- ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、まとまりのある創作表現を創意工夫すること。
- イ(ア) 音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解すること。
- ウ 創意工夫を生かした表現で旋律や音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けること。

指導事項を組み合わせると、
「音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解するとともに、それらを生かしたまとまりのある創作表現を創意工夫して旋律をつくる」という指導内容となる。
これは、従前の指導事項では、
「言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること」と同様の指導内容となる。

3. 題材の目標

音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解するとともに、それらを生かしたまとまりのある創作表現を創意工夫して旋律をつくる。

題材の目標については、左記のように一文で示す場合と、下記のように育成する三つの資質・能力別に示すことが考えられる。
(1) 音階や言葉の特徴及び音のつながり方の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解するとともに、創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付け、創作で表す。(知識及び技能)
(2) リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現を創意工夫する。(思考力・判断力・表現力等)
(3) 音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組む。(学びに向かう力、人間性等)
このように、資質・能力別に示すことで、題材の評価規準との関連が明確になる利点がある。生徒に身に付けさせたい資質・能力が具体的にすることで、指導の観点が分かりやすい。

4. 教材について

〈本題材の旋律創作に係る課題や条件について〉

- 次の俳句に音を付けて、4分の4拍子、4小節の旋律をつくる。
「雀の子 そこのけそこのけ 御馬が通る」
- 民謡音階を使う。

- 自分のイメージを生かす。
- 言葉のリズムや抑揚を生かす。
- 音のつながり方(順次進行, 跳躍進行, 上行, 下行)を工夫する。

課題や条件については、次のように示されている。

課題や条件とは、旋律や音楽をつくる前提として課された内容やつくる際の約束事のことであり、旋律や音楽をつくる学習をする際に必要なものである。したがって、指導のねらいに応じて、適切な課題や条件を設定することが、授業を展開する上で重要である。
「解説」p.54

本題材では、言葉の抑揚やリズムを生かし、音のつながり方を工夫しながら旋律をつくる学習を行う。

使用する俳句は、小林一茶の「雀の子 そこのけそこのけ 御馬が通る」を選択した。同じ言葉を繰り返すところ（そこのけそこのけ）や、母音を長く延ばして発音することでリズムが変わるところ（通る）など、生徒が工夫しやすいと考えた。また、俳句の描写が写実的であり、生徒が情景をイメージしやすいのではないかと考えた。

使用する音階は民謡音階（五音音階）とし、その特徴や雰囲気を生かして創作活動を行うこととした。なお、歌ったり、リコーダーで演奏したりしやすいように、用いる音はドからレまでとした。

5. 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
題材の評価規準	俳句の言葉の抑揚やリズム、民謡音階の構成音によって生み出される独特な雰囲気などに関心を持ち、それらを生かした音楽表現を工夫して旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、俳句の言葉や民謡音階の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。	俳句の言葉や民謡音階の特徴を生かした音楽表現をするために必要な技能（課題や条件に沿った音の選択や組合せなど）を身に付けて旋律をつくっている。

俳句は、学習のねらいに応じて工夫して選ぶことが重要である。

例えば、人間の心情を豊かに表現している俳句であれば、様々な感情を音や音楽で表すために、どのような音楽の要素を用いたらよいかを考える必要がある。また、俳句のもつイメージを表すために必要な、強弱や表現に関わる記号や用語などを考え、楽譜に追記させる活動も考えられる。これらの必要性について、自分の言葉でまとめたり、グループ活動などで話し合いを取り入れたりすることも考えられるであろう。

中学校の学習指導要領が全面实施される令和3年度からは、以下の3観点で評価する。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
題材の評価規準	①音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について表したいイメージと関わらせて理解している。(知識) ②創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付け、創作で表している。(技能)	リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっている。	言葉を基にイメージと関わらせて旋律をつくることに関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組もうとしている。

6. 指導と評価の計画(全3時間) ※評価基準と評価方法については省略

時	◆ねらい ●学習内容 ・学習活動	○指導上の留意点
1	◆音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解する。	
	●本題材の見通しをもつ。 ・童謡「ぞうさん」「犬のおまわりさん」を聴き、歌詞の言葉のリズムや抑揚と旋律との関わりを理解する。 ・本題材では、言葉のリズムや抑揚を生かして、音のつながり方を工夫して旋律をつくることを知る。	○楽譜を見ながら聴き、言葉のリズムや抑揚と旋律との関わりを視覚、聴覚の両面から理解させる。 ○ふだん使っている言葉のリズムや抑揚を生かして旋律をつくれることを知らせ、旋律創作の面白さに気付かせる。
	●音符、休符、民謡音階について復習する。 ・4分音符、8分音符、4分休符、8分休符の長さの割合を確認する。 ・民謡音階の特徴を確認する。	○「タン」「タ」などと発音しながら手で打つなどして、実感を伴って音符や休符の長さの割合を確認させる。 ○音階を歌ったりリコーダーで演奏したりして確認させる。また、既習教材にも触れる。
	●記譜の仕方を確認する。 ・言葉のリズムを音符や休符で表す。	○長音や促音のところは特に注意させる。
	●言葉の抑揚と音高との関わりを理解する。 ・言葉のリズムや抑揚を音符や休符で表し、記譜の仕方を確認する。	○言葉を発音しながら、抑揚に合わせて手を上下に動かすなどして確認させる。
	●音のつながり方や民謡音階の特徴を理解する。 ・順次進行、跳躍進行、上行、下行について、それぞれの特徴とどのような感じがするかを考え、グループで話し合う。 ・民謡音階の特徴についても、グループで話し合う。	○旋律の音のつながり方には、順次進行と跳躍進行の2種類があることを説明し、生活の中にあふれている音楽は、この2つの進行によってできていることに気付かせる。 ○それぞれの音のつながり方や民謡音階を音源などで確認しながら、特徴を知覚・感受させる。 ○音のつながり方の特徴によって、旋律の感じが変わること気付かせる。
	・グループの意見を学級全体の中で発表し合う。	○音なども活用して自分たちの考えをより正確に伝えることで、学級全体の理解がより深まるようにする。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【主体的な学びを実現する視点】

- 「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心をもち、生徒自ら学習活動を見通し、振り返り、課題を解決していこうとする学びのことである。
- 題材の最初に本題材と前題材との関連や学年間の系統的な接続を具体的に示したり、1単位時間の授業における目標や目指すべき姿を具体的に示したりしながら、生徒が何ができるようになればよいか(何を身に付ければよいか)を明確にすることが大切である。

授業のポイント①

- ◎「何を学ぶのか」を明確にする。
 - 大切なのは、創作活動を通して生徒に何を学ばせ、何を身に付けさせたいのか、そして身に付けたことが生徒の生活や社会の中の音や音楽、音楽文化とどのように結び付くのかを、教師が明確に捉えることである。また、生徒には、この題材で何を学習するのか、どのような技能の習得を目指すのかを伝え、見通しをもって学習活動に取り組めるようにすることが大切である。
 - 生徒にとって音楽の授業は、「歌う」「楽器を演奏する」「聴く」活動を行うものだというイメージが強いようである。「音楽をつくる」活動を音楽の授業で定着させるために、年間指導計画及び評価の中に位置付けるとともに、3年間の系統的な取組が必要である。

授業のポイント②

- ◎複数の領域や分野を関連させた題材構成を工夫する。
 - 年間の授業時数は限られているので、その題材の学習において主として扱う音楽を形づくっている要素やそれらに関わる用語や記号などを共通に設定して複数の領域や分野を関連させた題材を構想したり、主として扱う音楽を形づくっている要素やそれらに関わる用語や記号などの一部を共通にして、学びの連続性や系統性などをねらって複数の題材の配列の仕方を工夫したりするとよい。
 - 民謡音階については、「ソーラン節」の歌唱や郷土の伝統音楽の鑑賞で既に学習したものとして授業を組み立てている。言葉の抑揚に関しては、「夏の思い出」の歌唱で学んだ言葉の抑揚と旋律との関係を、旋律創作に生かすことも考えられる。
 - 指導計画の作成に当たっては、各活動を有機的かつ効果的に関連させることによって教科及び学年の目標の実現を図るように、内容の構成や題材の設定、適切な教材の選択と配列などに配慮することが大切である。

授業のポイント③

- ◎音楽科における知識の習得
 - 第1時では、音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴について理解する。第2時でイメージと関わらせて旋律創作をするための準備である。それぞれの音のつながり方や民謡音階を教師がピアノで演奏する、あらかじめ収録した音源を聴かせる、生徒に歌わせたりリコーダーで演奏させたりするなど、実感を伴った理解となるよう工夫したい。

※ワークシート例→p.18

◆リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したものと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつ。

●前時の復習と本時の見通しをもつ。

- ・言葉の抑揚と音高との関わりを確認する。(復習)
- ・音のつながり方の特徴を確認する。(復習)
- ・本時では前時に学んだことを生かし、イメージと関わらせて俳句に旋律をつけることを知る。(見通し)

●リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したものと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつ。

- ・俳句から感じ取ったイメージを自分の言葉でまとめる。

- ・俳句から感じ取ったイメージを旋律で表現するために、音のつながり方(順次進行、跳躍進行、上行、下行)や民謡音階の特徴をどのように生かしたらよいかを個人で考えてまとめる。

●創意工夫を生かして旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けて創作で表す。

- ・表したいイメージを旋律で表現するために、音のつながり方や民謡音階の特徴をどのように生かしたらよいか、考えたことを生かし、まとまりを意識して個人で4小節の旋律をつくる。

○情景や感情も旋律で表現できることを知らせ、旋律創作の面白さに気付かせる。

○俳句から感じ取ったイメージをしっかりとまとめられるよう、訳や解説を補足する。

○旋律の音のつながり方をいろいろと試す過程で、「このような旋律にしたい」という思いや意図をもたせる。

○言葉で説明できるよう、ワークシートも活用する。

○歌ったりリコーダーで演奏したりしながら、創意工夫して旋律をつくらせる。

○正解は1つではないので、創意工夫を生かして自由につくるよう伝える。

授業のポイント④

◎イメージと関わらせながら、身に付けた知識を生かして旋律を創作する。

○第2時は本題材の主たる学習活動に当たる。第1時で学習した音階や言葉などの特徴及び音のつながり方の特徴を生かしながら、生徒一人一人が俳句から感じ取ったイメージをどのように旋律創作につなげていくか、教師の「問いかけ」がとても大切である。

※ワークシート例→p.20

※教師の発問例→p.21,23

- ◆リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつ。
- ◆創意工夫を生かした表現で旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付け、創作で表す。

- 前時の復習と本時の見通しをもつ。
- ・自分のつくった旋律を演奏して確認する。(復習)
- ・本時では、協働的な学習を通してよりイメージに合った旋律になるよう工夫することを知る。(見通し)

- 自分が感じ取ったイメージを表現するために工夫した点を確認させる。
- 前時の学習を深める活動をすることを伝える。

- リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、まとまりのある創作表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつ。
- ・3～4人のグループに分かれ、俳句から感じ取ったイメージ、表したいイメージを表現するために工夫した点、つくった旋律を互いに発表し、気付いたことをアドバイスし合う。
- ・グループの代表作品を選んで学級全体の中で発表し合い、意見を述べ合う。

- 旋律の音のつながり方の特徴に注目して互いのつくった旋律を聴き、作品について意見を述べ合うようにする。
- 楽譜でも確認させる。
- 楽譜を見ながら作品を聴けるようにし、作曲者の思いや意図と音楽的な特徴とを関連させて考えながら鑑賞させる。
- 作品を聴いて工夫していると感じた点や、改善したほうがよいと感じた点などを述べさせる。

- 創意工夫を生かして旋律をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けて創作で表す。
- ・ 表したいイメージと音のつながり方の特徴とを関わらせて、自分の旋律を完成させる。

- 学級全体で出された意見やアドバイス、分かったことを生かしながら、思いや意図をもち、創意工夫させる。

- 本題材の学習を振り返る。
- ・旋律創作の学習を振り返り，ワークシートに記入する。

- 授業を通して学んだことや、旋律をつくる意義について、自分の考えをまとめさせる。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【対話的な学びを実現する視点】

- 「対話的な学び」とは、学習活動を通して他者と協働することによって、多様な見方・考え方を学ぶことである。客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考え方をもったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていくことが重要である。
- 作品及び作品に対する思いや意図を発表し合ったり、意見を述べ合ったりすることで、作品に対する多様な見方や考え方があることを知り、自分の作品への考えを深めていく。

※ワークシート例→p.22

教師の発問例，生徒の発言例



言葉のリズムを生かすためにどんな工夫をしたのかな？



俳句を音読したときに、「雀の子」と「そこのけそこのけ」の間に間があると感じたから、4分休符を入れたよ。



私は休符を入れなかったけれど、声に出して読むと、確かに自然な間が空くね。俳句ののどかな雰囲気を出すために、2分休符を入れてみようかな。



言葉の抑揚を生かすためにどんな工夫をしたのかな？

「そのけ」の言葉の抑揚は  だけど、追い立てる感じを出すために全ての音を上行でつなげたよ。



旋律の動きは  のままで、2回目の「そこのけ」を1回目より高い音にして畳みかける感じを出そうと思う。でも、確かに全てを上行にすると1回の「そこのけ」だけでも追いつける感じが生まれるね。

※地域によって、言葉の抑揚が異なる場合もある。

主体的・対話的で深い学びのための授業改善の視点

☆【深い学びを実現する視点】

- 「深い学び」とは、「音楽的な見方・考え方」を働かせて自分自身の課題を見つけ、思いや考えを基に豊かに意味や価値を創造していくことである。
- 「深い学び」の鍵となるのが、「音楽的な見方・考え方」である。「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげられるようにする。

言葉のリズムや抑揚を生かして旋律をつくろう（２，３）

・次の俳句に音を付けて、４分の４拍子、４小節の旋律をつくる。
「^{すずめ}雀の子 ^{そこ}のけ^{そこ}のけ ^{おうま}御馬が通る」

・民謡音階を使う。

用いる音

民謡音階

・自分のイメージを生かす。
・言葉のリズムや抑揚を生かす。
・音のつながり方（順次進行、跳躍進行、上行、下行）を工夫する。

〔訳〕 雀の子よ、さあどいたどいた、今からお馬が通って危ないよ。
〔解説〕 子雀に優しく注意した句とも、おもちゃの馬に乗った子供が遊んでいる情景を詠んだ句とも解される。季語は「雀の子」で、季節は春。

１．俳句を音読したり，〔訳〕や〔解説〕を参考にしたたりしながら，描かれている情景を思い浮かべ，俳句のイメージをまとめよう。

春のよく晴れた日の朝，小さくてかわいい雀が道に降りているところへ，大きな馬がゆっくりとやってくる。危ないと思い，雀にやさしく声をかけている。

- ２．言葉のリズムや抑揚を生かして旋律をつくろう。
- (1) 言葉のリズムを「タン」や「タ」などに置き換え，音符や休符で表そう。
- (2) 言葉の抑揚を確認し，その抑揚に合った音をドレミソラドレの中から選ぼう。
- (3) 言葉のリズムを生かして，４小節になるように旋律のリズムをさらに工夫しよう。
- (4) つくった旋律を五線に書こう。

言葉(俳句)	す ず め の こ そ こ の け そ こ の け お う ま が と お る
置き換え	タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ タ ー タ タ タ ー タ
音符・休符	
言葉の抑揚	
階名	ド レ レ レ レ ド レ ミ ソ ミ ソ ラ ド ソ ラ ラ ラ ラ ソ ラ

より民謡音階の特徴を生かした旋律にするために，あらかじめ終止音を指定するのもよい。

※最後は○のどれかの音で終わる。

教師の発問例



季節はいつかな？

時間帯は朝かな？昼かな？夜かな？

雀や馬の体の大きさはどのぐらいかな？

馬はどんな様子で歩いているかな？
駆け足かな？ゆっくりかな？



3. 表したいイメージを表現するために旋律をつくるときに工夫した点を、下の①～⑤から3つ以上を選んでまとめよう。

- ①言葉のリズムを生かすために工夫した点
- ②言葉の抑揚を生かすために工夫した点
- ③民謡音階の特徴を生かすために工夫した点
- ④音のつながり方を生かすために工夫した点
- ⑤その他に工夫した点

・俳句を音読したときの間を生かして、「雀の子」のあとに4分休符を入れた。
・「そこのけ」は、言葉の抑揚に合わせて旋律を上行させた。また、同じ言葉を2回繰り返して追い立てているような感じがしたので、2回目は音を高くした。
・「ミレド」で旋律を終わらせようとしたところ、民謡音階らしく感じられなかったので、民謡音階の旋律らしく終われる音を探し、ラの音で終わらせた。
・よく晴れた日の朝、道に降りている雀に優しく声をかけているイメージを表現するために、音が急に跳躍しないようにした。
・「雀の子」の小さくてかわいい様子を表現するために、高い音を使った。
・雀に比べて馬は体が大きくゆっくり堂々と通るイメージなので、「御馬が通る」のところは4分音符を使った。

4. 他の人の作品を聴いてよい表現だと思ったところや自分の旋律に生かしたいことなどを書き、自分のつくった旋律をさらに工夫しよう。

「雀の子」に長めの音符を多く用いることで、遠くにいる雀に呼びかける様子がよく表現されていると思った。

5. 表したいイメージと関わらせて旋律をつくる学習を通して学んだことを振り返り、旋律をつくる意義について考えたことをまとめよう。

旋律をつくることはとても難しいと思っていたけれど、言葉のリズムや抑揚をもとに音のつなげ方を工夫することで、自分でも旋律をつくることができ楽しかった。この次は「優しい」とか「悲しい」といった感情をもとに旋律をつくってみたい。

同じ俳句をもとに旋律をつくっても、人によって選ぶ音やリズムが異なり様々な旋律ができたことから、音楽に対する感じ方は多様であることを実感した。いつも家で聴いている音楽も誰かがつくったものなので、なぜその旋律なのか、また、なぜひかれるのかなどを考えてみたい。

旋律をつくるときに工夫させる際の教師の発問例



「雀」と「馬」の体の大きさの違いを表すために、どんな工夫ができるかな？

→音の高低やリズムを工夫させる。

動きの速さを表現するために、どんな工夫ができるかな？

→リズムを工夫させる。



「そこのけそこのけ」の部分は同じ言葉が2回繰り返されているね。それを生かすためには、どんな工夫ができるかな？

→リズムや音の高低を工夫させる。

俳句を音読したときに、「雀の子」のあとに自然な間が空くね。どうしたらその間を旋律に生かせるかな？

→休符を入れてリズムを工夫させる。



民謡音階の特徴を生かすために、どんな工夫ができるかな？

→音のつながり方や終止音を工夫させる。

互いの作品を聴き合い、参考になったことや自分の作品に取り入れたい工夫などを書くことによって、音楽に対する見方や考え方を広げる活動をする。

学んだことや理解したこと、できたことなどをまとめるとともに、授業を通して旋律創作に対する考え方がどのように変わったかについても記述させる。

また、創作活動の意義について考えさせるために、「人はなぜ音楽をつくるのだろう？」という問いかけをしてみるのもよい。

本社	〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-15 TEL:03-3957-1175 FAX:03-3957-1174 (代表)
中部支社	〒460-0024 名古屋市中区正木4-8-7 れんが橋ビル8F TEL:052-678-3151 FAX:052-678-3153
関西支社	〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1-14-17-601 TEL:06-6943-7245 FAX:06-6920-2170
西部支社	〒751-0808 下関市一の宮本町2-7-14 TEL:083-256-4747 FAX:083-256-1010